
遅れてきた王子

神崎みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遅れてきた王子

【Nコード】

N0430Z

【作者名】

神崎みこ

【あらすじ】

高名な魔女の怪しい予言を振り回す迷惑で残念な王子と、それに付き合わされる有名な五人姉妹の見合い話。癖のある彼女たちとどこまでも残念な王子の見合いは成就するのか？

序(前書き)

Asymmetryというサイトからの移植改訂版となります

序

四つの大陸が海に浮かぶ世界にて、そのどれにも属さず、またほぼ中央に位置する島国は、長い間平和を謳歌した国家がその島を治めていた。

象徴的立場におかれた王は、尊敬される存在ではあるものの、彼女らを冗談とともに口の端にのせたとしても、笑いこそすれ咎められることはない、といった程度の扱いとなっている。その代わりに、その国の議会を運営する議院たちは非常に優秀であり、また出自によらず取り立てられる彼らは、国民皆の憧れの存在でもある。長い間他国に侵入されず、侵入しないこの国は、温暖な気候とあいまって、非常にのんびりとした国民性を有し、それはまた王家も同様な性質の人間で構成されていることを示している。王家の人間が思いつきで起す騒動は、人々の笑いや噂話の種となり、彼らは興味と尊敬と嘲笑を一手に引き受ける、道化、のような存在となりつつあった。

「このような娘はおらぬか！」

突然現れた若い男を、一同は胡乱げに見つめた。

一瞬にして自分に視線が集まったことに、男はたじろぎ、だが己の職務を思い出したのか、上ずった声で口上を述べる。

「殿下のお召しである。隠し立てするのためにならぬぞ」

精一杯虚勢を張ったその姿に、館の主は失笑で答える。

「まあ、隠し立てするほどのもんじゃないけど」

王家からの使者というのに、一向にひるんだ様子のない年かさの女は、男から渡された文書を一瞥する。

確かに、そこには彼女が思い当たる人物について尋ねる文言がしたためられている。

それを渡された彼女よりも若い女は、さらに冷めた目で男を見上げる。

彼女たちは今、家族そろつての食事ときである。

久しぶりに揃つた一族での晚餐を邪魔された格好となる彼らは、使者に全く敬意を払うようすもない。いや、一部にはご馳走を目の前にしてあからさまに敵意を持った視線を飛ばす人間もいるほどだ。

「偶然とはいえ一族が揃つているときにきたのは、神の思し召しなのかも」

全く神を信じていない女が、そう呟く。

「さつさと答えぬか」

「それよりも、ここまで通しちゃった警備の方がまずくない？お母様」

「それは、まあ、王家の紋章なんて、見たことがあるほうが少ないし。ともあれ処分は必要だな」

「どうせなら替えてしまえばよいのでは？役立たずは嫌いです」

「そう言うな、あれにはあれの言い分があるさ」

自分の言葉が全く聞こえていないかのような態度を見せ付けられ、男はさらに声を張り上げる。

「答えぬか！ええい、不敬罪で処分してくれるわ！」

その言葉に、ようやく最も年かさの、母と呼ばれた女が立ち上がり、男の側近くへと歩き出す。

「我が家を？四大陸にも我が家あり、と呼ばれるヴァイシイラ家の人間を？」

商売人らしく笑みを浮かべ、だが妙に迫力のある態度で言い募る。使者はたじろぎ、あとずさる。

「まあいい、使いの人間をいじめても仕方がない」

ごくり、と何かを飲み込み、使者は女の言葉を待つ。

「お尋ねの人物だが」

無言を重ねる使者に、さらに笑みを浮かべる。

「もうとつくに死んでいる」

だが、齎された衝撃的な言葉に、使者は思わず声をあらげる。

「ああ、うるさい。大声を出さなくとも聞こえている」

それを淡白にあしらい、彼女はなおも続ける。

「その髪色、顔かたち、おまけに名前。確かにそのものは我が家に居た」

「だったら、嘘などつかず、さっさと差し出すがいい」

「死んだと、言っただろう」

「そんなはずはない。それは紫の魔女の予言だ」

「紫の魔女、ねえ」

紫の魔女とは、好んで紫色の外套を纏っていた魔術師の女であり、力が台頭してきたころより王家に仕えていた人間だ。彼女は魔術師というよりも、神がかった予言を得意としており、それにより、この国が幾度も恩恵を受けていることは、子供でも知る事実である。だが、晩年は老化とともにその予言も不確かなものが増え、時間軸がずれた予言をしていたのは、ごく一部が知るところである。恐らく、使者がもたらしたその予言は、彼女の遺言ともいえるものだろう。魔女は死に、ご大層な葬儀が行われたばかりだ。

「謀ったところでもおもしろくもないだろう。商人は信用第一。嘘は身を滅ぼすだけではすまない」

彼女の迫力に、使者は口を開けない。

「あのな、その手配された女は、確かにこの家にいた。いや、この家を作った」

「だったら」

「黒髪が美しい、サユリ、という女は」

「そうだ、素直に出せばよい」

「私の母親だよ」

「は？」

「だから、サユリという女性は、私の母だし、彼女はもうとっくにこの世を去った」

「いや、だが」

信じようとはしない使者に、ヴァイシイラ家の面々は次々と自己紹

介をしていく。

サユリの長女、長男、次女、長女の娘たち、長男の息子と娘。そこまできて使者はようやく事態を把握した。

「サユリ嬢は、いない」

絶望とも思える顔をしながら、使者は急ぎ王宮へと帰っていった。取り残されたものたちはためいきをつき、一族をまとめる長女の合図で団欒を再会した。

珍しき黒髪を有したサユリという少女を娶れば、この国はまた一段と豊かなものになるだろう。

紫の魔女が遺したその予言は、王へ伝えられ、急ぎ跡取りである王子の手配のもと、予言された場所へ使者が送られた。

だが、晩年の魔女の予言は時間軸があやしかったことをどうしてだか知らなかった王子は、まだ見ぬ花嫁へ夢を募らせていた。

それが、ヴァイシイラ家が巻き込まれた騒動であり、この国に長きに渡って伝えられる笑い話の始まりであった。

長女・アベリアの場合

アベリアは祖父の代で築き上げた商家ヴァイシイラの跡取り娘であり、サユリの長女の長女にあたる。比較的男女差別のないこの国においても、女性が跡をとる、ということとは珍しい部類に入り、また、それがヴァイシイラ家ほどの規模ともなるとなおさらである。それは祖母がこの家に取り入れた思想によるところであり、能力のあるものが男女、生まれ順に問わず跡を継げばよい、ということがヴァイシイラ家の家訓ともなっているからである。

その点、アベリアは、非常に優秀な商人であり、また情にほだされないある程度冷酷な性格は、商家としてうってつけである。長子、ということ抜きにして考えても、その適正から彼女がヴァイシイラを継ぐことに異議を唱えるものはいない。

彼女は今日、王家からの呼び出しに肅々と応じ、控えの間にて待機中である。

高そうな装飾品に囲まれた部屋に萎縮してしまうものも多いなか、軽んじられているとはいえ王家からの招聘、という圧力をものともせず、アベリアは艶やかな笑顔を称え、ゆったりと椅子に座していた。

ことの起こりは、珍しく一族が揃った食事会の出来事に遡る。

王家の使いだ、という使者の尋ね人は、アベリアの祖母であった、というなんとの間抜けな話は、酒席での笑い話になりこそすれ、それを気にするものは一族の中には一人もいなかった。

それが、どういうわけか適齢の女性は全て王宮を訪ねてくること、という横暴ともいえる呼び出しがヴァイシイラ家にかかり、彼女はとりあえず、ということ様子伺いにやってきたのだ。

状況把握すらできずに、妹たちを危険な目にあわせるわけにはいかない。一家の長としての矜持が、彼女にここへ足を運ばせたのだ。半分以上好奇心、といったもので満たされているのだが。

呼び出しておいて散々待たせる王宮側にかすかな不快感を抱くものの、それを微塵もみせることなく、おっとりおよびやく呼び出された彼女はどこか別の部屋の扉をくぐる。

「顔を上げよ」

男の声でそう告げられ、彼女は華やかな面を男に向ける。

そこには、彼女が知りうる情報と合致する、王家の跡取り、第一王子がふんぞり返って座っていた。

「他のものは？」

「おいおいとまいりましょう。ヴァイシイラ家の跡取りとして、殿下にまずはご挨拶を」

形式的な挨拶をやりとりし、アベリアは笑顔を称えて王子を見据える。

「サユリという女がおまえの祖母だというのは確かなのだな」

尊敬すべき祖母を呼び捨てにされ、内心思うところはあるものの、アベリアは静かにその質問に答える。

「はい。確かに特徴を考えれば、祖母だと思われます。そのようなものは今ではヴァイシイラ家にはおりませんし。何よりその名前が祖母以外を指すとは思えません」

この国でサユリ、という名前は非常に珍しい。いや、いないといって差し支えない。

彼女はどこか遠くの国からやってきた、というのは誰もが知る事実ではあるが、その遠くの国、というのがこの世界のどこにもない国

であることを知るものはヴァイシイラ家の人間だけである。

ある日突然祖父の目の前に現れた少女は、まるでこの国の言語を解さず、また全てがこの大陸に育ったものとしてはありえない習慣、思考をもった女性であったことは、のろけ話として祖父に嫌というほど聞かされている。

「ところで、おまえは独身か？」

「いえ、夫がおりますが」

あっさりと答えたアベリアに、王子はあからさまに落胆する。

アベリアが、さっさと商人として優秀な男を婿ととったことは有名な話である。金持ちの美しい娘であるアベリアが結婚した際には、枕をぬらす男が両指の数では足りないほどいた、というのは笑い話ではあるが。

「そう、か。おまえならちようどよいと思っただが」

ここにきてようやく、アベリアは王子たちの狙いを確信した。

いや、薄々感づいてはいたが、よもやそれほどまで阿呆な理由で呼び出されたとは信じたくなかったのだ。

紫の魔女の予言、を成就させるべく、サユリの血縁を狙って縁談を持ち込もうなどとしている、とは。

予言などなくともこの国は議会が適切に運営しているし、所詮彼らはお飾りだ。

お飾りはそれらしく、それなりの嫁を娶ればよいのだ。

決して、アベリアのような見目はよくとも野心のある女を引き入れてはいけない。

アベリアは、王宮に入り込んだのち、他大陸にさらに支店を広げる夢を一瞬だけ計画し、この男と寝室を供にせねばならないことに気がついてしまい、わからないように頭を振る。

「私は失礼しても？」

「下がってよい」

顔もあわず、落胆したままの王子に退室を求められ、アベリアは大人しくそれに従う。

多忙を極める商人を呼び出し、数刻の時間を無駄にさせた王子は、その代償を美容、宝飾用品を売り倒したアベリアの商魂に払うこととなった。

「既婚とはおいしいことをした。私にふさわしい女だったのに」

アベリアが帰り際にせっせと商売活動をしている中、この国の世継ぎである王子は、アベリアの顔を思い出しながらためいきをついていた。

「何をとぼけたことをいつているんです。分不相応という言葉を感じなさい」

側に控える側近が顔色も変えずに言葉を挟む。

「あれが商人の出だとしても、側室ならば気にしないぞ」

「逆ですよ逆。あれほど優秀な女性がお飾りのほんくら王子に嫁ぐ意味がない。寝言は寝てからおっしゃってください」

言葉遣いは丁寧だが、辛らつな言葉を吐き出す側近は、才も家柄も十分ながら議会と王家、この残念な第一王子をつなぐ中間管理職の

ような立場に捨て置かれている。

この王家は確かに象徴として議会の上に君臨している。だが、代々の王たちはそこに大したくちばしを突っ込むことはせず、対外的に装飾品のように威厳をまとって存在すればよい、ということとを自覚している。慈善事業や文化活動には熱心で、その代わりに政治にはかなり疎い。

だが、この王子は中身が全く伴わないにも拘わらず、議会において権限をもつことをたくらんでいる迷惑な野心家だ。ことあるごとに余計なちよっかいをかけ議会を混乱させ、ひいては国民生活にまで迷惑をかける。それを解消すべく、あてがわれたのが側近であり、貧相な王子の隣で眉間に皺を寄せて立っている細身な彼である。政治家として優秀であり、なおかつ家柄の良い彼がこの位置に立ったのは、運が悪いとしかいいようがない。どれ程同情はしても誰も交代してはくれない役目なのだから。大きな子供の守をしているかのような毎日は、彼の眉間の皺を深くし、ため息の数を増やす。

「だいたい、側室はもういるでしょう?」

「・・・・・・あれは、まあ」

権力者の常として、女は必要だな、という単純な理由で、家柄の良い娘たちを娶ったはいいが、彼はその奥向きを一向に掌握していない。寵を競う、のではなく、己こそが一番だと勝手に競い合った妃たちの浪費は、目に余るものがあり、側近が手配したものである。清により一段落したものの、今だその火種は燻っている。彼は、数名居る側室を把握もせず、まとめることもできないくせに、紫の魔女の予言を頼ってまた馬鹿なことをしているのだ。

「あのばあさんがばけてたのはご存知でしょう?」

時間軸のずれた予言は、全くあてになるものではなく、過去の出来

事であれば、それはただの歴史書の文言に他ならない。

「いや、そんなことはないぞ。私はあれを信用してある」

何を馬鹿なことを、という言葉を飲み込み、ただ深く息を吐き出す。

「だいたい、少し調査すればヴァイシイラ家ほどの人間はすぐわかりますでしょ？やり手の当主を呼び出して、何をしているのですか、何を。私ですらアベリアさまが結婚していたことは存じておりまして！」

「そんなことは一言も書いてなかったけどなあ」

王子はやけに薄い調査書に目を落とす。

「まあ、いいんですけどね」

あなたの気が紛れれば、という言葉をあえて黙し、側近は次の仕事へと王子をせきたてることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430z/>

遅れてきた王子

2011年12月2日19時48分発行